

[国 語]

「意見文を書くポイント」への意識を高め、活用する 児童を目指した意見文作文の指導の工夫

－「書く観点」に着眼したモデル意見文の比較検討を通して－

田中 行人*

1 主題設定の理由

書くことが楽しくて仕方がない。興味のあることだけでなく、与えられた課題に対しても、自分の考えを明らかにして書く。時には立ち止まり、もう一度自分の考えや述べ方を見つめ直し、前のめりになって書き進めていく。自分の国語の授業で、そんな児童を育ててみたいと考えている。

しかし、筆者の学級では、筆者の理想とかけ離れた姿がある。例えば、昨年度、「気になる記号」の学習で、身の回りにある記号について調べた内容をもとに、報告する文章を書く学習を行った。報告書の組み立てに沿って下書きを書き、推敲する観点を提示してから自分の文章を読み返させた。しかし、意欲が落ちることなく推敲まで進められた児童はほとんどいなかった。その理由は、「書き方のポイントが多すぎるために、何をどのようにして書いたらよいか分からなくなる。」「文字の間違い以外で何を見直せばいいのか分からない。」であった。そこで、「ことわざについて調べよう」の学習では、分かりやすい表現や表記を「はじめ」「中」「終わり」で分けて示し、時間をそれぞれ分けて書く活動を行った。すると、「何を書けばいいかわからない。」といった児童は少なくなり、比較的、自分の考えを明確に書ける児童が多く見られた。しかし、「書く時にはこのような工夫をすればよい。」という児童の認識は低く、既習した知識・技能をいかに次の学習に生かすことができるのが課題となった。つまり、「はじめ」「中」「終わり」において、それぞれ書き方のポイントを明確に示すことで児童は書きたいことの中心を明確にして書くことができたが、「文章構成を考えること」については困難を感じているということが明らかになった。

新学習指導要領における国語科3、4年生の「書くことの目標」は、「相手や目的に応じ、調べたことなどが伝わるように、段落相互の関係などに注意して文章を書く能力を身に付けさせるとともに、工夫をしながら書こうとする態度を育てる」ことである。『小学校学習指導要領解説 国語編』によれば、前段は、書く能力、後段は、書く態度を示している。換言すれば、「相手や目的に応じ、調べたことなどが伝わるように、段落相互の関係などに注意して文章を書く能力を身に付けさせること」、「工夫をしながら書こうとする態度」を育てることが求められていると考える。

そこで、本研究では、4年生「組み立てを考えて書こう」の学習を中心に、モデル意見文の比較検討を通し、見つけたポイントを手掛かりに意見文作文の指導を行っていく。

田中は、意見文作文の中学校実践では、「論理的整合性の差の明確なモデル意見文を比較させるという指導法は、生徒に関心を持たせ、意見文を書くときのポイント（①主張を明確にする、②主張に合った事例をあげる、③事実と意見を区別する、④構成を意識する）を自覚させることに、有効に作用したと言える。」¹⁾と述べている。

また、入内島は、モデルの提示の必要性を次のように説く。『『自分の考えをどのように伝えたらよいか。』『どのように書き表したらよいか。』などの子どもの思いに応えるためには、モデルを提示することが必要である。（中略）最も身近にあるよいモデルを提示することにより、そのモデルにまねて書くことができる。書き方が分かるからである。『十の言葉より、一つのよいモデル』の提示である。』²⁾

しかし、管見の限りでは、小学校において、モデル意見文を比較させることによる実践研究はほとんど見られない。田中（2010）の実践では、モデル意見文の比較の際に、意見文を書くときのポイントを黒板に図示しているが、意見文を書くときのポイントが児童の手元に残り、それらを手掛かりに作文活動に参加できるワークシートがあれば、小学校段階においても有効性をもつと考えられる。そのためには、モデル意見文を基にした共同推敲（相互批評）の場を意図的に設け、その効用を児童が実感できるように工夫したいと考える。

*長岡市立富曽亀小学校

2 研究の目的

書く観点を明確にもち、文章構成を考えながら自分の文章に生かすことができる児童を目指し、「意見文を書くポイント」に着眼したモデル意見文の比較検討を通した指導が有効であるか検討する。

3 研究における実践の内容と検証方法

(1) 実践の内容

田中（2010）の実践では、課題設定の意図が不明確であったことから、生徒の作文に表現の差が生まれたことが課題として挙げられている。そこで、課題設定が児童にとって自分事として考えられるものであることで実践がより有効性をもつのではないかと考えた。

本学級の児童は、総合的な学習の時間において「川と生きる」といったテーマで川と関わっている。校外学習で川と触れ合い、その場にいる生き物の魅力を感じている。中には、川でつかまえた生き物を学校に持ち帰り、世話をすることで愛着をもち始めた児童もいた。「このまま学校で飼いつけたい。」と思う児童がいる一方で、「狭い水槽に棲まわせるのは、かわいそうだから川に戻した方がいい。」という思いをもつ児童も出始めた。そこで、総合的な学習の時間に「川でつかまえた生き物をどうするか」について話し合いを行った。すると、「学校で飼いつける」と「川に戻す」といった二つの意見に分かれ、時間内に学級で意見をまとめることができなかった。総合的な学習の時間における「子ども発」の学習課題は、児童が悩み、迷い、解決せずにはいられない課題であると考え、本単元と関連を図ることで自分の考えを何とかして相手に分かりやすく伝えたいと願う児童の姿が期待できると考えた。さらに、「川でつかまえた生き物をどうするか」という課題は、児童にとって反対意見の相手を説得したい、説得しなければならないという相手意識、目的意識をもち続けて意見文を書くことができるものであると考え、学習課題を設定した。

これまでに児童は「書くこと」に関して、さまざまな学習を積んでいる。構成については、「はじめ」「中」「終わり」の基本構成を学び、基本的な説明文や報告文を書いてきた。文章を教科書教材の作例を参考にしながら書いたり、教科書から提示された大切なポイントを読んでから書いたりしたが、メモをつなげただけの文になっている児童や、工夫した表現を積極的に取り入れて書けない児童が多かった。そこで、本単元ではモデル意見文を比較する活動を取り入れることで、「意見文を書くポイント」を意識させることが必要だと感じた。児童は比較、検討することで書くポイントを自分の言葉で表し、まとめることができる。そして、教授された観点ではなく、自ら見付け出した観点をもとに、文章を書く活動を通して、児童は自分の考えが明確になるよう工夫して文章を書くことができる。

モデル意見文の比較検討においての手立ては以下の2点を考えた。

① 「はじめ」「中」「終わり」のモデル意見文の比較

田中（2010）の実践では意見文として完結した二つの文章を導入で用い、生徒に比較検討させた。良いと思う方を選択させ、その理由を複数人に発表させ、考えを共有することで「型の理解」が深まったと述べる。本研究では、「はじめ」「中」「終わり」のそれぞれのモデル意見文を比較検討することで、より児童が「意見文を書くポイント」（表1）の理解を深めることができると考えた。

② 教具の工夫・活用

本単元では以下の3点の教具を用いて活動を進めた。

ア 文章構成カード

本単元の4、5、6時間目で活用した。自分の考えや、その考えを決めた理由、それに関する事例をカードに書いた。それぞれのカードはイのカラー構成シートの色と同色の物を用いる。そのため、児童は「はじめ」と「中」、「終わり」の考えを明確に区別し、書く活動に参加できた。

また、児童が達成感や充実感をもてるようにカードは短文のものとした。「中」の文章を書く時間では、複数枚のカードを書き、自分の考えにあった構成を選ぶことができるように工夫した。

表1

筆者が児童に期待する「意見文のポイント」
①語尾は「です・ます」「だ・である」のどちらかでそろえる。
②理由について触れ、「中」につながる（対応した）書き方をする。
③句読点を適切な箇所に書く。
④理由は「～からです。」と書く。
⑤内容のまとまりで段落を分ける。
⑥「みなさんどうでしょうか。」と問いかけることで、読み手に考えさせる。
⑦反対意見を予想して書く。
⑧「このように」「このような理由から」など、まとめであることを示す1文を書く。
⑨自分の考えの中心をもう一度書く。（はっきりと伝えるため。）

イ カラー構成シート

本単元では考えの中心をはっきりさせた双括型（結論・理由・結論の文章構成）の書き方を学習した。「はじめ（結論）」「中（理由）」「終わり（結論）」の構成を自分の文章に生かせるようにした。カラー構成シートは「はじめ」「中」「終わり」でそれぞれ橙色、水色、緑色に分け、双括型の可視化を図った。児童は意見文を書く活動の前に、意見文の構成の理解を深め活動に参加できた。

ウ これで説得！ポイントシート

本単元では意見文を書く活動の前に、例文を比較、検討し、観点を見付け出す活動を行う。観点を自らの言葉でまとめ、チェックシートに記入した。一方的に示された観点ではなく、「自分で見付けた」「自分の言葉で書けた」といった実感を言葉に残すことで、自分の考えをより説得力のある文章に表すことができるよう工夫した。なお、「書くポイント」、「観点」という言葉では児童にとって共通理解を図りにくいため、本単元では「説得ポイント」と言い換えた。そうすることで、児童は意見文を書く時に必要な観点を、相手を説得させるための大事なポイントだと理解し、文章に生かすことができた。児童には例文を比較、検討して「こんな書き方をすると相手に納得してもらえるな。」「こんな書き方をすると相手に伝わりそうだな。」と思ったところを「説得ポイント」として挙げさせた。

また、「これで説得！ポイントシート」に書いた「説得ポイント」は推敲する場面でも効果的であった。推敲する場面では自分でまとめた「説得ポイント」を振り返って自分で書いた文章を見直すことができるよう工夫した。

(2) 検証方法

これらの二つの手立ての有効性を、学級全体と2人の研究対象児A児、B児の学びの様相を基に、以下の2点で具体的に検証する。

① 事前事後のアンケートの回答や記述の比較

本研究では田中（2010）の事前事後アンケートを、小学校中学年向けの言葉に置き換えたもので単元の始めと終わりに行う。それらの回答結果や記述を比較し、児童が「意見文を書くポイント」を自分の文章に生かそうとしているのかどうか考察する。

② 意見文による考察

本単元で書いた意見文を分析し、児童が「意見文を書くポイント」を意見文に生かすことができているのか検証する。

4 実践の概要

- (1) 単元名 「組み立てを考えて書こう ～自分の考えを伝えるには～」小学4年教科書 光村図書
- (2) 研究の対象 長岡市立F小学校第4学年1学級（27名）
- (3) 実践期間 令和元年6月10日～6月21日
- (4) 単元計画 単元の目標 書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げ、書き表し方を工夫することができる。

指導計画

次	時	主な学習活動
一	1	・自分の考えを相手に伝える文章を書く時に、どんな組み立てで書けばよいか話し合い、学習の見通しをもつ。
	2	・自分の立場を決めた理由や、それに関係する事例をカードに書き出す。
	3	・意見文を書く時の組み立てを知る。 ・書き出したカードを使って、説得力のある文章の組み立てを考える。
二	4	・二つの「初め」の文章を比較、検討し工夫している点を見付け出す。 ・観点を整理し、「初め」に自分の考えの中心を書く。
	5	・二つの「終わり」の文章を比較、検討し工夫している点を見付け出す。 ・「はじめ」と「終わり」が対応していることに気付く。 ・観点を整理し、「終わり」に自分の考えの中心を書く。
	6	・二つの「中」の文章を比較、検討し工夫している点を見付け出す。 ・観点を整理し、「中」に内容のまとめりと詳しく書く。

三	7	・チェックシートを振り返り、「中」の文章の続きを書く。 ・チェックシートをもとに文章を推敲する。 ・推敲した文章を読み合い、互いに確認する。
	8	・意見文を読みあって、感想を伝え合う。(いい書き方だなと思ったところにはシールを貼り、内容についての感想は付箋に書いて伝える。) ・学習を振り返り、まとめる。

5 実践の結果と考察

(1) アンケート調査からの有効性

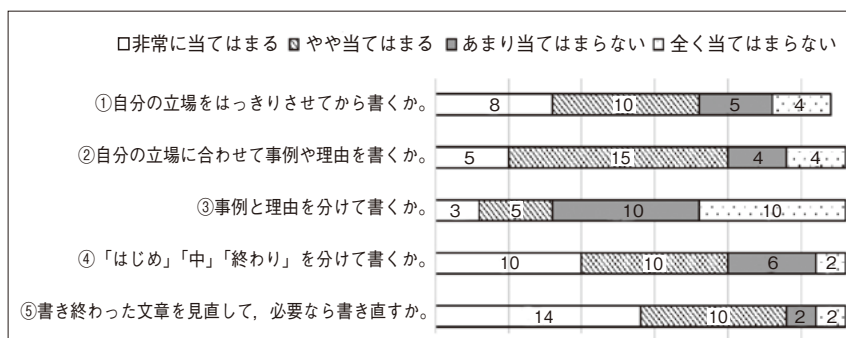
このアンケート調査からは、①「自分の立場をはっきりさせてから書くか」、②「自分の立場に合わせて事例や理由を書くか」、③「事例と理由を分けて書くか」、④「はじめ」「中」「終わり」を分けて書くか、⑤「書き終わった文章を見直して、必要なら書き直すか」の5項目について質問したものである。回答は、[1] 全く当てはまらない、[2] あまり当てはまらない、[3] やや当てはまる、[4] 非常に当てはまる、から選択させた。

事前アンケート（図1）と事後アンケート（図2）の比較から以下のことが明らかになった。

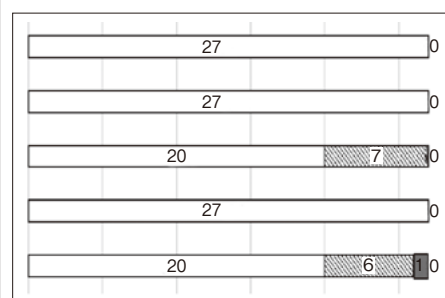
「①自分の立場をはっきりさせてから書く」、「②自分の立場に合わせて事例や理由を書く」、「④「はじめ」「中」「終わり」を分けて書く」ことへの意識は、事前アンケートでは半数以上が[4] 非常に当てはまる、[3] やや当てはまる、と回答したが、事後アンケートではすべての児童が[4] 非常に当てはまる、と回答している。もともと、それぞれの項目に対する意識は高かったが、一層「文章構成を考える」ことへの意識が高まったものと判断できる。

「③事例と理由を分けて書く」ことへの意識は事前アンケートで半数以上が[2] あまり当てはまらない、[1] 全く当てはまないと回答していた。単元前に行った意見文作文の授業において、事例と理由の明確な関係性について指導が至らなかったことが影響していると考えられる。しかし、事後アンケートではすべての児童が[4] 非常に当てはまる、[3] やや当てはまる、と回答した。本単元で活用した「理由事例カード」が理由と事例の関係性を明確に理解する上で有効であったと考えられる。

「⑤書き終わった文章を見直して、必要なら書き直す」ことへの意識はほぼ全ての児童が、事後アンケートにおいて[4] 非常に当てはまる、[3] やや当てはまる、と回答した。これは、「これで説得！ポイントシート」を活用し、自ら見付けた「意見文を書くポイント」を振り返り、改めて自分の意見文を見直すことができたからだ考える。意見文を書く場面だけでなく、推敲する場面においても有効であったと言える。



【図1 事前アンケート】



【図2 事後アンケート】

(2) 意見文、ワークシートから見た有効性

① 抽出児（A児）

A児は「はじめ」「中」「終わり」において計12個の「意見文を書くポイント」をワークシートに書いている。重複しているポイントもあるが、筆者が予想している「意見文のポイント」（9個）のうち7個を見付け、自分の言葉で書いている。ワークシートに書かなかったポイントは④理由は「～からです。」と書く、と⑦反対意見を予想して書く、であった。A児の意見文を見ると、④理由は「～からです。」と⑦反対意見を予想して書く、のどちらも表現できていることが分かる。つまり、ワークシートに「意見文のポイント」が書かれていなくても、児童はモデル意見文の比較検討を行うことで、ポイントを意識して意見文を書くことができた。

6 成果と課題

成果の一つ目は、児童が「意見文を書くポイント」への意識を高めたことである。事前アンケート、事後アンケートの結果から分かるように、全ての質問項目において児童が意識を高めたことが明らかになっている。「意見文を書くポイント」を自分の言葉でまとめることで、意識が高まったと考えられる。

成果の二つ目は、児童が「意見文を書くポイント」を活用して自分の考えを書けるようになったことである。

表2は「意見文を書くポイント」がどれほど学級で意見文に取り入れられたかまとめたものである。半数以上の児童が全てのポイントを取り入れることができたことが分かる。B児の振り返りから分かるように、取り入れたくても文字の制限があったために、取り入れることができなかった児童もいたと推測できる。

その点を考えると、⑥「みなさんどうでしょうか。」と問い掛けることで、読み手に考えさせる、⑦反対意見を予想して書く、などのポイントを意識していた児童はこの人数以上であると言ってもよい。全体の人数に対して全ての項目で半数以上の児童が意見文に取り入れられているという点を考えると、モデル意見文を比較する、

「意見文を書くポイント」をまとめる、ことが文章構成を考えて書くことに有効に働いたと考えられる。

以上の二つの成果から、「意見文を書くポイント」への意識を高め、活用できたと言うことができる。

一方で、課題の一つは、文章構成の型が双括型のみの指導になってしまったことである。本研究では、「意見文を書くポイント」への意識を高めること、それらを活用することに重点を置いて指導したため、双括型で学習を進めた。利点としては、学習者にとって「はじめ」「中」「終わり」の三部構成が意識しやすく、文章構成の型の定着が期待できることである。しかし、児童の表現力を限定的にしており、時と場に応じた表現方法を考えなくなることが危惧される。頭括型（結論・理由の文章構成）や尾括型（理由・結論の文章構成）についても体験させ、様々な文章構成の型を表現できるようにしなければならない。

もう一つは、モデル意見文を比較する視点を広げるということである。「意見文を書くポイント」＝「書き方」として考えている児童が大半であった一方で、「意見文を書くポイント」＝「いかに相手を説得できる内容か」という認識の児童がいた。「意見文を書くポイント」が「書き方」だけでなく、「内容」である視点を取り上げることで、さらに児童一人一人にとっての「意見文を書くポイント」への意識が高まったのではないかと考える。この課題を念頭に置き、引き続き、実践を積み重ねていきたい。

表2

筆者が児童に期待する「意見文のポイント」	人数
①語尾は「です・ます」「だ・である」のどちらかでそろえる。	25/27
②理由について触れ、「中」につながら（対応した）書き方をする。	27/27
③句読点を適切な箇所に書く。	20/27
④理由は「～からです。」と書く。	22/27
⑤内容のまとまりで段落を分ける。	27/27
⑥「みなさんどうでしょうか。」と問いかけることで、読み手に考えさせる。	14/27
⑦反対意見を予想して書く。	14/27
⑧「このように」「このような理由から」など、まとめであることを示す1文を書く。	25/27
⑨自分の考えの中心をもう一度書く。（はっきりと伝えるため。）	27/27

引用文献

- 1) 田中宏幸「意見文作文における文章構成法の習得と生徒間交流：アクションリサーチ実習における授業の検証」『広島大学大学院教育学研究科紀要、第二部、文化教育開発関連領域』第59号 広島大学大学院教育学研究科、2010年、111p
- 2) 入内島周一「子ども実態、学校や地域の実態を生かして」『実践国語研究 No223号』明治図書、2001年8-9月 26～27pp

参考文献

- 1) 大熊徹「書くことの言語活動 25の方略」教育出版、2014年
- 2) 大村はま「作文学習指導の展開」筑摩書房、1983年
- 3) 桂聖・廣瀬由美子「授業のユニバーサルデザインVol.3」東洋館出版社、2011年
- 4) 田中宏幸「意見文作文における文章構成法の習得と生徒間交流：アクションリサーチ実習における授業の検証」『広島大学大学院教育学研究科紀要、第二部、文化教育開発関連領域』第59号 広島大学大学院教育学研究科、2010年
- 5) 新潟県小学校教育研究会「学習指導改善調査事業 国語4年の分析」、2017年